WHAT

フランス・ストラスブール大学

人間文化創成科学研究科
ジェンダー社会科学専攻
地理環境学コース　博士前期課程　2 年
佐藤香寿実

フランスでは何もかも、人によるし、場合による。ça dépend（サ・デポンまたはサ・デパン）とは、フランス語で「人による」、「場合による」という意味であるが、フランス人は、この言葉をとてもよく使う。レストランで「どの料理がおすすめか」と聞いても「ça dépend（あなたの好みによる）」。友達に「一人旅が好きか」と聞いても「ça dépend（場合による）」。それは確かにそうだろうけど、会話にならない…とため息をつくこともしばしば。それくらい、フランスは ça dépend の国なのだ。これは個人主義であることに関わりがあるのだろう。それぞれの人が広い自由裁量を持っており、柔軟に（それぞれ自分の考え方に基づいて）規範を超えて行動していることの表れだ。

また、強い中央集権の伝統を持ちながら、地域によって文化も言葉も大きな違いがある。さらに、移民大国としても有名なフランスでは、日本にいる時には想像もできないほどさまざまな出自を持つ人が存在し、宗教や肌の色も多種多様だ。

この ça dépend の国で、私は 10 か月間勉強をし、あそび、旅行し、色々なものを見た。このように日本の外に出て異文化社会に身を置き、多文化の存在を知ることで、日本の見え方が変わったように思う。ストラスブール大学には日本学科があり、多くのフランス人学生が日本語や日本史を勉強していたが、彼らの日本に対する熱いまなざしは、日本文化の強みや独自性を私に教えてくれた。アニメやゲーム、ドラマ、アイドルなどのサブカルチャー、高度なテクノロジー、治安が良く秩序だった社会、日本語の難しさと表現力。そういう部分に惹かれている友人たちの姿を見ることは、私にとって喜ばしいことであった。と同時に、彼らが見つめているのは日本のごく一部であるのではないか、という違和感、さらには「日本文化」とは、「日本」とは何を指しているのか、という疑問が生まれた。今は日本史の教科書を読みなおしている。「外」を見るための留学は、「内」を見つめ直す旅でもあった。「内」と「外」の境界線はもちろん、ça dépend ではあるが。

もうひとつ、留学に出て変わったこと。それは自分の生き方について、可能性がぐんと広がったことである。フランスでは日本のような新卒一括採用を取っておらず、各自がインターンなどの経験を積みながら就職先をそれぞれで探す。私の場合、留学前はこの先ずっと日本で暮らしていくという考えしか持っていなかった。今でもその見通しは変わっていないが、他の可能性を頭の隅に置くようになった。留学中に、幾度も国境を越えて様々な国を渡り歩いて生きてきた友人たち、様々な出自を持つ友人たちと出会い、人生は人それぞれだと実感した。やろうと思えば、チャンスは無限に広がっている。

今、フランスが好きかと聞かれれば、私は迷いなく「ça dépend」と答えるだろう。好きなところもあるし、嫌いなところもある。好きか嫌いか、日によっても変わる。適当で潔くないという声も出そうだが、白黒つけずに可能性を残しておくこの考え方は、私が留学で得た宝物である。